

[001] **LOVE ME DO**

レコーディングアーティストとしてのビートルズのデビュー曲で、発表は1962年10月。マッカートニーがこの歌を書いたのは1958年。16歳の時だったそうだ。そのせいだろうが、メロディーも歌詞もシンプルなものになっている。ミドルエイトはレノンが加えたいい。

Love me, do. は、肯定命令文 *Love me.* に、動詞を強調するための助動詞 *do* が付いたもの。つまり、「愛してよ、ねえ」という意味である。*Do love me.* という構文も可能だが、*do* を後置にしたのは、*you* および *true* との脚韻を狙ったためと考えられる。

この他動詞 *love* を繰り返したものが *Love, love me, do.* 。最初の *love* を、「ねえ、君」という呼びかけの名詞と解釈することも文法的には不可能ではないが、その解釈は感覚的には疑問である。

you know という語句が今後たびたび出てくるが、文字どおり「あなたは知っている」という意味とは限らない。文頭に置いて、「知ってる?」、「実はね」、「聞いてよ」などといった感じで話を切り出す場合もあるし、文末に付けて、「そうでしょ?」、「実は～なんだよ」というような意味を付け足す場合もある。ここでは「知ってると思うけど」という感じ。*You know I love you.* で、「君も気付いていると思うけど、僕は君が好きなんだ」という意味になる。

次のラインでは *I'll* という短縮形で登場するが、この助動詞 *will* は主語の意志を示すもの。この説明にぴんと来ない人は、文法書なり辞書なりで、未来時制の意志未来について再確認することを勧める。

true は「本当の」という意味と思いがちだろうが、*I'll always be true.* (いつまでも誠実でいるよ) では「忠実な」という意味。男女関係においては「浮気をしない」ことを指す。このように英語では、ひとつの言葉が多様な意味を表すことが多いので、あやふやな記憶や先入観に囚われずに、まめに辞書を引くことが肝要である。

ミドルエイト。不定代名詞 *someone* と *somebody* の後ろに形容詞的用法の不定

ビートルズ英語読解ガイド (POD 二版) 内容見本 著作権保護コンテンツ

出だしの *Well, she was just seventeen.* に潜む意味を知らないと、この歌の面白さが完全には分からない。この文を、TOCP-5111の歌詞リーフレットおよび“ビートルズ全詩集”では『あの娘はまだ17だった』、そしてTOCP-71001(奥田祐士対訳)では『あの娘はたったの17歳』と訳しているが、正確ではない。この *just* は「まさしく〜」または「〜したばかり」という意味。つまり、この文は「彼女はちょうど17歳だった」または「彼女は17歳になったところだった」という意味であり、裏にあるのは、‘もう立派な女’という思惑である。重要なのは、16歳以上であること。英国では16歳になると、米国では州によって16~18歳になると、性行為に同意することが法的に許されるのである。1960年前後に〔*Sweet Little Sixteen*〕、〔*You're Sixteen*〕、〔*Happy Birthday Sweet Sixteen*〕といった米国製の歌がヒットしたのは、このような文化背景があるためだ。他方、マッカートニーが *sixteen* (二音節)ではなくて *seventeen* (三音節)としたのは、メロディーへの乗り具合が理由だったかもしれないが、結果的に、アメリカンポップスに安易に追従しない姿勢が明らかになった。

これでリスナーは、レノンが提案した *You know what I mean.* の意味がはっきり理解できたことだろう。なお、この *what* は先行詞を含んだ関係代名詞のようにも見えるが、意味を考えると、疑問代名詞。この間接疑問文は「何のことか分かるよね」というような和訳になる。

And the way she looked was way beyond compare. の *the way* と *she looked* (合わせて「容姿」)との間には、そもそもは関係副詞 *how* または関係代名詞 *in which*、昨今では関係代名詞 *that* の関係副詞的用法が省略されている。そして *beyond compare* は「比類ない」という意味の成句。「はるかに」を意味する副詞 *way* が付いて、*way beyond compare* で「物凄く素晴らしい」という意味になる。

この「*how* が省略されている」という記述に対して、増補版の読者から批判的な意見が届いた。「*how* はあるべきものではないので省略ではない」というもの。しかし、実際には *how* を明示する人がいる。例えば、リトル・リチャードの作品に〔*It Ain't Whatcha Do (It's The Way How You Do It)*〕がある。マイケル・ジャクソンの〔*The Way You Love Me*〕の歌詞の中核は *I like the way how you're holding/loving/touching/kissing me.* (© 2004 Mijac Music) である。また、ヨーコ・オノは、夫ジョン・レノンの存命中に書いた〔*Let Me Count The Ways*〕の中で、

〔011〕 SHE LOVES YOU

それまでのラブソングは、一人称の人物が二人称もしくは三人称について歌ったものばかりだった。ところが、このレコードでは、第三者が友人たちの恋を語るという趣向。レノンとマッカートニーの非凡さが、作曲と演奏の面だけでなく、発想や作詞の面でも現れ始める。

You think you've lost your love. は「恋に破れてしまった」とも「恋人を失ってしまった」とも解釈できる。後者を意味する場合、レノン／マッカートニーは *your girl* と言いきりそう。しかし *It's you she's thinking of.* と押韻を踏んでいることを考えると、*girl* を *love* に置き換えたと思えないこともない。日本語に翻訳するならば、「君は失恋したと思ってるけど」と、表現をぼかすのがよいだろう。

「会う」という意味の *see* が出てきたので、この機会に *see* と、やはり「会う」を意味することがある *meet* との違いを確認しておこう。第一に、初めて会うのは *meet*。また、既に知り合っている人でも、約束して落ち合う場合や、駅や空港で出迎える場合は *meet* である。加えて、たまたま出会ったケースで使うこともある。*see* だと、遠くから見かけただけという解釈も可能だからだ。

一方、*see* は、前述のように、たまたま見かける（目に見える）というのが第一の意味。次に、既に知り合っている人と会うのが *see* である。その人の家を訪問する場合も含む。また、付き合っているという意味にも使う。というわけで、「昨日彼女に会った」は、*I met her yesterday.* ではなく、*Well, I saw her yesterday.* なのである。

It's you (that) she's thinking of. は強調構文。*She is thinking of you.* という文の中の *you* という語句を強調するために、それを *it is* と *that* (目的格の場合は省略できる) の間にはさんだもの。しかし、この強調は何のためだろう？ *You think you've lost your love.* と 韻を踏ませるための構成と考えられるのはもちろんだが、もしかすると、「僕ではなくて君のほう」という心理の表れかもしれない。

続く *and she told me what to say* についても説明しておく。不定代名詞の後ろに形容詞的用法の不定詞が付いた名詞句は、*someone to love* (直訳すると「誰か愛すべき人」) という形で〔001〕に出てきた。*what* は疑問代名詞であるものの、

[023] **CAN'T BUY ME LOVE**

マッカートニーによるこの作品は、急いで書き上げたためか、詩としては面白くない。しかし、英語を学ぶ材料としては十分である。

I'll buy you a diamond ring, my friend と *I'll get you anything, my friend* は第四文型 (S+V+O+O)。この buy (買ってやる) と get (手に入れてやる) は授与動詞として働いている。

Money can't buy me love. (金で愛は買えない) も第四文型の好例のように見えるが、実はそうではない。「買ってあげる」というケースと違って、「金で買える」という意味の buy においては、第三文型 (S+V+O) になる。それではこの me は何かと言うと、現代英語では非標準だが、心性的与格と言って、「僕のために」とか「他の人はどうであれ、僕にとっては」いう心理を表示するもの。一種の間接目的語である。これが入った文は [026] と [The Ballad Of John And Yoko] にも出てくる。また、この意味の buy を心性的与格を入れずに使った文が、三番、そして [082] と [100] の中にある。

2015年になって、『*Money can't buy me love* は *Money can't buy my love* のことで、僕の愛は金で買えないという意味ではないか?』という疑問が読者から寄せられた。確かに、英国北部の娼婦が「体は売っても、心は売らない」というような発想で *Money can't buy me love* という可能性があるかもしれない。しかしながら、この歌の文脈においては、そのような解釈は成り立たない。なぜなら、話者が相手を喜ばず (結果として相手の愛を得る) ためには何でも買ってやると言うのは、話者の持金で直接的に愛を買うことができないと心得ているからである。話者は愛情 (love for me) なり恋人 (a girlfriend) なりを欲しているのであって、自分の愛情または恋人が売れ物として見られていると意識しているわけではない。そもそも、英国におけるレコードの購買層とラジオの聴取者がみなロンドンを向き、ビートルズが米国での成功を目指していた時、シングル盤曲をリヴァプールなまり (北英方言) で歌うなど、あるだろうか? スターダムに登り、好き勝手にレコードを制作できることに気づいてから録音した非シングル盤曲 [098] には、*Me hiding me head in the sand* というラインが出てきたが。

[062] DAY TRIPPER

第11作シングルの第二A面。物事を徹底的に行う質だったレノンが、情事や薬物使用に消極的な人々と一線を画するかのよう歌う。タイトルにもなっている day-tripper は「日帰り行楽客」という意味。しかしこれは比喩で、「中途半端な頻度でトリップする人」を指す。そして名詞 trip には「幻覚剤使用による幻覚体験」、動詞 trip には「幻覚剤を使用する」という意味もある。しかし、このレコードが発売された1965年当時は、このような意味は一般には知られていなかった。

Got a good reason で始まる文には主語がない。安易な想像が間違った先入観を生むといけないので、この文へは後で戻ってくることにしよう。

a one-way ticket (片道の切符) とは、悪い事態の原因のことを言う。ここでは「近寄らないほうがいい者」という意味であろう。

It took me so long to find out, and I found out. は、文法的には二通りの解釈が可能。ひとつは、it を自動詞としての to find out の形式主語とみなす解釈。しかし、この解釈では、何が分かったのかが明確ではない。また、and I found out がつまらない繰返しに聞こえてしまう。もうひとつは、it は前述のことを指し、最初の find out を他動詞とみなす解釈。日本語にすると、「そのことを見破るのに時間がかかった。でも真相を探り出した」ようになる。

二番。 *She's a big teaser.* の teaser は、「思わせぶりな女」とか「男をじらす女」のこと。ここでは程度を表す形容詞 big は、「すごく」というふうに、副詞のように訳すと、こなれた日本語になる。「酷く思わせぶりな女」のごとし。

half the way は「道のりの半分」ということ。それで、 *She took me half the way there.* は「僕を道のりの半分だけ連れて行った」ということなので、「僕に中途半端な扱いをした」という意味になる。TOCP-51126の歌詞リーフレットにある『危うくその気になるところだったぜ』という訳は当たらない。話者は最後まで行く気 (to go all the way) になっていたのであるから。

三番。 a one-night stand は「一晩だけの興行」。転じて、「一回だけの情事」。 a Sunday driver は、休日ドライバーが慎重に運転するように、慎重に行動する人

[063] DRIVE MY CAR

マッカートニーが書いたものにレノンが手直した歌詞のようだ。ロサンゼルスあたりで出会った男女の会話がコミカルに描かれている。自分が言ったことは間接話法、相手が言ったことは直接話法、その他は擬音だけという構成。

“*But you can do something in-between.*” は単純明解ではない。実際、RUBBER SOUL (TOCP-51116) (内田久美子対訳)、同 (TOCP-71006) (奥田祐士対訳)、そして“ビートルズ全詩集” (内田久美子訳、2005年、ソニー・ミュージックパブリッシング) は、どれも異なった解釈を掲載している。『でも それだけじゃつまらないわ』、『でもその前にあなたにもできることがあるわ』、『だけど あなたにもできることがあるわよ』という具合である。私の解釈はこの三つのどれとも違う。鍵は *in-between* という言葉。「中間的な」という意味の形容詞と考えるならば、*something in-between* は映画スターと一般大衆の間の身分を指していると推測できる。他方、*in-between* を「中間に」という語意の副詞とみなすと、*something in-between* は、女がスターになるまでの間に男がする仕事ということになろう。ただし、この場合、文頭の接続詞は *But* でなくて *And* であって欲しい。つまりところ、私は、“*But you can do something in-between.*” は「でも、あなたは何か中くらいなことをしたら？」という意味で、「ねえ。私の運転手になるのはどう？」と続いて行くと考ええる。

その “*Baby, you can drive my car.*” の *can* は、提案を表している。

二番。TOCP-51116のリーフレットおよび“ビートルズ全詩集”にある『見通しが明るくなってきた』という対訳は誤りである。原文は *I told that girl that my prospects were good.* であって、*I told that girl that my prospects were getting good* ではない。話者が言ったことを直接話法にすると、*I said to that girl, “My prospects are good.”* (僕は将来有望なんだぜ)。「運転手の仕事なんか」という思いが裏にあるのだ。よって、それに対する女の返事 “*Baby, it’s understood.*” の適切な訳は、「分かってるわよ」というようなものになる。

“*Working for peanuts is all very fine.*” の *peanuts* は、「はした金」。

“*But I can show you a better time.*” は「でも、それよりもっといい暮らしをさ

[064] **NORWEGIAN WOOD** (THIS BIRD HAS FLOWN)

これもストーリーに落ちがある、面白い歌詞だ。そして早期の〔003〕以来しばしば使われてきたダブルミーニングや意図的不明確性が見られる。

まずは、冒頭 *I once had a girl.* の *have*。第一印象では「(恋人が) いる」という意味を思い浮かべる。しかし、*or should I say she once had me?* と続くと、首をかしげる。そして歌詞を最後まで聞くと、*have* の解釈には、「客として招く」、「だます」、「凹ます」、「～と性交する」などの可能性があることが分かる。

女が話者を部屋に入れて、*Isn't it good?* (素的でしょ?) と自慢したのは、*Norwegian wood*。『ノルウェーの森』という邦題を目にした後で聴いた人は、既に高校レベルの英文法をきちんと学んでいれば、何かおかしいと感じただろう。ノルウェーにある森の一つに言及しているのならば、不定冠詞が付いた *a Norwegian wood*。特定の森であるならば、定冠詞が付いた *the Norwegian wood*。ノルウェーの森は大体そうだとすることならば、*Aren't they good? Norwegian woods.* という冠詞の付かない複数形になるはずである。一方、無冠詞の単数形で用いられるのは物質名詞や抽象名詞であることも覚えているかもしれない。そもそも、部屋の中へ入ってから外の自然に感心したとしたら、順序が違う。

部屋を飾っていたのは *Norwegian wood* (ノルウェー産の木材)。この歌詞は主にレノンが書いたものだが、マッカートニーが後に *PAUL McCARTNEY – MANY YEARS FROM NOW* (Barry Miles 著、1997年 Henry Hold and Company 刊) の中で語ったところによると、当時(1964~65年) ロンドンの若者たちの間で人気があった木製の内装や家具のことだそうだ。材質は安価なノルウェー産の松だったとか。この曲の邦題、TOCP-51116の歌詞リーフレット、そして“ビートルズ全詩集”にある『ノルウェーの森』は、間違った想像に基づいた誤訳である。

She asked me to stay の *stay* が話者の誤解を深めることになる。女は「ゆっくりしてね」という意味で言ったのだが、話者は「泊っていいわよ」と解釈したことが、後で分かる。

二番へ進む。<*bide one's time*> は「好機を待つ」。TOCP-51116のリーフレット、TOCP-71006のリーフレット、そして“ビートルズ全詩集”にある『時間をつ

[080] **ELEANOR RIGBY**

今度はマッカートニーが社会について歌う。テーマは孤独な人の存在。劇的な描写は、当時の恋人、舞台俳優シェーン・アッシャーを通しての交友関係の影響かもしれない。

Eleanor は女性の名。Rigby は苗字。ここでは架空の人物である。

picks up the rice in the church (教会で米を拾う) というラインから、この女性は教会の掃除婦かそれに類する者であることが分かる。欧米では、新婚旅行への門出を祝って、花嫁花婿に米を投げかける習慣がある。実際、関係副詞 *where* に導かれる形容詞節 *where a wedding has been* が、結婚式があったばかりであることを示している。現在完了の完了用法。

(She) *lives in a dream*. (夢うつつに暮らす) から、彼女が独身であることが想像できる。窓から外を眺めて、何かを待っている (*waits at the window*) 。

その動作の付帯状況を表すのが *wearing the face that she keeps in a jar by the door* という分詞構文だが、REVOLVER (TOCP-51117/TOCP-71007) に付属の歌詞リーフレット (内田久美子対訳/奥田祐士対訳)、THE BEATLES ONE (TOCP-65600) のリーフレット (奥田祐士対訳)、そして“ビートルズ全詩集” (内田久美子訳、2005年、ソニー・ミュージックパブリッシング) の対訳を鵜呑みにしないように。『仮面を取り出してかぶり』とか『顔をまといながら』と訳してあるが、彼女が顔に着けているのは *mask* ではない。*face* である。そしてこの場合の *face* は「化粧品」のこと。*jar* は広口のびん。

住込みの小間使で、人々の前に顔を出さない女が、何のために誰のために化粧をするのか? その疑問が *Who is it for?* である。彼女は、言わば、白馬に乗ったプリンスの到来を待っているのだろう。なお、この疑問代名詞 *who* は *for* の目的格となっているが、口語では *Whom is it for?* とは言わない。

二番の出だしに *writing the words of a sermon* というフレーズがあるが、前置詞の選択が適切でない。マッカートニー自身も気付いたようで、1984年の映画 GIVE MY REGARDS TO BROAD STREET の中では、そして1990年録音の TRIPPING

[094] **STRAWBERRY FIELDS FOREVER**

無定冠詞の *strawberry fields* は、救世軍がリヴァプールで営んでいた孤児院 Strawberry Field に由来するとのこと。少年時代のレノンは、木の多い敷地に忍び込んで、遊び場にしていたようだ。一方、THE BEATLES ANTHOLOGY (2000年 Chronicle Books 刊) に次のようなレノンの発言が収録されている: In ‘Strawberry Fields’ I’m saying, “No, always think it’s me” and all that bit. (「それが俺なんだと、時々じゃなくて、いつも思っている」とか、そんなことを言うてるんだ)。つまり、このナンバーには非現実性への郷愁と自己表現とが同居していると考えて、歌詞を解釈するのがよいだろう。

出だしの *Let me take you* (僕と一緒においでよ) の後、そして意味の上では *to Strawberry Fields* に続く *down* は、「いなかへ」とか「ここから離れて」という意味。距離的にも時間的にも遠くなったリヴァプールにおける少年時代を回想するレノンの感覚の現れと思われる。ちなみに、この歌(の主要部分)を書いたのは、映画 HOW I WON THE WAR 撮影のために六週間の長きにわたって家族や仲間から離れてスペインに滞在していた時。自分を見詰め直す良い機会だったようだ。

and nothing to get hung about (そして煩わしいことは何もない) の *and* と *nothing* の間には、*there’s* が省略されている。<get hung about something> は「…のことで心配する」。

Living is easy に続く *with eyes closed* (目を閉じて) は、[048] の *with you by my side* (君がそばに居て) や [052] の (with) *head in hand* (頬杖をついて) と同じ組立て。付帯状況を表している。

Misunderstanding all you see. は「見ると誤解してしまう」。子供のむくな心を懐かしむようだ。

It’s getting hard to be someone の *someone* は、不定代名詞ではなく、名詞。意味は「ひとかどの人物」。日本の子供がよく言う「偉い人」のことである。

二番。 *No one, I think, is in my tree. I mean it must be high or low.* について、レノン自身、上述の本の中で次のように語っている: *What I was trying to say in*

本書における他書との類似表現

Love Me Do

2015年4月に出版された文庫本に『Love me, do. はいわゆる命令文で、最後のdoは動詞を強調するための助動詞。Do love me. といってもいい。つまり〔中略〕「愛してよ、ねえ」という意味になる。また、I'll always be true（ずっと誠実なままでいるよ）は〔中略〕「浮気なんてしない」という意味で使われている』という記述がある。

私が初めて次のように書いたのは、2012年9月発行の本書増補版だった：

Love me, do. は、肯定命令文 *Love me.* に、動詞を強調するための助動詞 *do* が付いたもの。つまり、「愛してよ、ねえ」という意味である。*Do love me.* という構文も可能〔中略〕*I'll always be true.*（いつも誠実でいるよ）では「忠実な」という意味。男女関係においては「浮気をしない」ことを指す。

つまり、この部分は私の盗用や無断引用ではない。

PS I Love You

2015年4月に出版された文庫本に『故郷（もしくは家）に残してきたいとしい恋人（もしくは妻）を思う手紙調の歌詞』という記述がある。

私が初めて次のように書いたのは、2012年9月発行の本書増補版だった：

家もしくは故郷に残してきた妻なり恋人なりを思う手紙調の歌になっている。

つまり、この部分は私の盗用や無断引用ではない。

I Saw Her Standing There

2015年4月に出版された文庫本に『「彼女はもう立派な女。アレができるってわけ」という意味』という記述がある。

私が初めて次のように書いたのは、2012年9月発行の本書増補版だった：

裏にあるのは、‘もう立派な女’という思惑である。

つまり、この部分は私の盗用や無断引用ではない。

I Wanna Be Your Man

2015年4月に出版された文庫本に『曲がシンプルなのは、ドラムを叩きながら歌えるようにと配慮されたのでしょうか』という記述がある。

私が初めて次のように書いたのは、2012年9月発行の本書増補版だった：

リンゴ・スターがドラムを叩きながら歌えるようにと、シンプルな曲構成と簡単な歌詞になっている。

つまり、この部分は私の盗用や無断引用ではない。

You Can't Do That

2015年4月に出版された文庫本に『出だしから強烈な内容。I got something to say that might cause you pain (おまえは嫌がるかもしれないが、言わなきゃいけないことがある)』という記述がある。

私が当該文を次のように訳したのは、2012年9月発行の本書増補版においてだった：

出だしの *I've got something to say that might cause you pain.*

(おまえは厭がるかもしれないが、言わなきゃならないことがある)

つまり、この和訳は私の盗用や無断引用ではない。自身で翻訳したものである。

I'll Cry Instead

2015年4月に出版された文庫本に『タイトルの「ぼくが泣く」はヘンですね。なんだか、「ぼく」が他人の代わりに「泣く」ように聞こえる、せめて、「いまは泣く

だけ』というような題に変えてほしい』という記述がある。

私が初めて次のように書いたのは、2012年9月発行の本書増補版だった：
一般的に『ぼくが泣く』から受ける印象は、他の人の代りに泣くということではないだろうか。[中略] この文には「そうできないから、今は泣くだけさ」というような日本語が当てはまる。
つまり、この部分は私の盗用や無断引用ではない。

Norwegian Wood

2015年4月に出版された文庫本に『当時（60年代半ば、そうした木製の家具はロンドンをはじめとする都会の人たちに人気があった』という記述がある。

私が初めて次のように書いたのは、2012年9月発行の本書増補版だった：
当時（1964～65年）ロンドンの若者たちの間で人気があった木製の家具のことだそうだ。
つまり、この部分は私の盗用や無断引用ではない。

The Word

2015年4月に出版された文庫本に『Give the word a chance to say（あの言葉に一つのチャンスを与えよう） / That the word is just the way（あの言葉こそが未来を開く手立てだ）の部分に注目』という記述がある。

私が当該文を次のように訳したのは、2012年9月発行の本書増補版においてだった：
<give somebody a chance> は、「…にチャンスを与える」。Give the word a chance to say that the word is just the way. は「その言葉こそが手立てであることを示す機会を、その言葉に与えよう」。
つまり、この和訳は私の盗用や無断引用ではない。way に、「やり方」とか「方法」ではなく、英和辞典にない「手立て」という日本語を充てたのは、私自身のアイデアである。

Fixing A Hole

2015年4月に出版された文庫本に『「穴」（a hole）や「ひび」（cracks）が自由な発想を妨げる暗喩として歌われているのがわかる』という記述がある。

私が初めて次のように書いたのは、2007年8月発行の本書初版だった：

雨と裂け目は、自由な創造的思考を妨げるものとして歌われている。

つまり、この部分は私の盗用や無断引用ではない。

引用する場合、私は著作権法に則って、該当箇所ごとに引用範囲を明示し、出典を明記している。巻末の参考文献一覧は、あくまで参考にした資料のことであって、引用の明示にはならない。

また、曲名の原題は、本文中においては〔 〕で囲むというのも、“ビートルズ英語読解ガイド”初版（2007年8月発行）から用いている、私自身のアイデアである。それまでの和書は、同様な場合で括弧を使う際は、「」にしていた。